北日本新聞

発行所
北日本新聞社
富山市安住町2番14号
郵便番号 930-0094
電話(076)445-3300(受付案内)
©北日本新聞社 2002

紙面批評

号外皮切り 多彩に展開

手厚く「田中さん報道」

今回から紙面批評を担当することになった。私自身、新聞をこよなく、日々楽しみにしている。朝刊はその日の戦略を考えるヒントとし、夕刊は就寝前の心地よい眠り薬となっている。

ここ一、二週間の紙面で特筆されるのは、何と言っても田中耕一さんのノーベル賞受賞報道だろう。一連の記事は郷土紙ならではの取材であった。

九日の号外による速報に続き、十日夕刊、十一日朝刊には単独インタビューが即座に掲載された。十日朝刊では四ページ、十一日朝刊では八ページものスペースを割いての報道は、経済的にも社会的にも明るさをもたらした。博士号を持たず、学会でも無名だった一人のサラリーマンの受賞に勇気づけられた人は大勢居るだろう。

一連の同時進行ドキュメント「ノーベル賞　田中耕一氏はその時」や、二十日朝刊の田中さん里帰りの特別紙面は、県人のねばり強さのイメージアップはもとより、日本中に元気をもたらした。

二十日の社説「田中さんに続け　県人に示唆与えた生き方」は秀逸。教育論を含め、まち（国・地域）づくりは人づくりそのもの。世界で最も有名なサラリーマン田中さんの報道が今後も楽しみだ。

十二日朝刊「私は忍耐強い〝富山人〟」や、十四日の「県人祝福に満面の笑み　近畿県人会が特別招待」は、うれしい記事。十四日朝刊の「核心ざっくばらん」に登場した富本孝県新世紀産業機構専務理事のインタビュー「ノーベル賞『バイオ』に弾み」は第三者の話としてタイムリーだった。

さて、ほかのニュースに目を移すと、北朝鮮拉致被害者の帰国の記事が、十六日朝刊で七ページの特別紙面。十八日にもそれぞれが故郷の土を踏んだ感激の様子が写真グラフやドキュメントで手厚く伝えられた。帰国した五人にとって、二十四年ぶりに映った故郷はどうであったろうか。私たちも生まれ育った心の故郷をなくしてはならない。

二十日朝刊の二十一―二十三面には特集「活気づく高岡市南部地域　巨大SC、新幹線で活力」が座談会を含めて掲載されていた。タイムリーな企画だが、高岡の求心力を高めるために、どんなソフト面の充実が求められているのか具体的な掘り下げが欲しかった。

十六日朝刊から大型連載「聖地カイラス巡礼　チベット4000キロの旅」がスタートした。霊峰立山を抱く富山県民にとって、連載「21世紀の贈り物　立山・黒部　世界へ発信」とともに楽しみだ。

とやまITベンチャー協議会長　松原　吉隆